

「尊厳死」希望し協会加入

前回、私の父の終末期について書きました。父の意向が聞けないまま、有料老人ホームへ入居させたことが、今も気がかかっています。父が意思を示せぬうちに希望を聞いていれば……でも、元気だった頃、そんな問いかけができたかどうかとも思いません。最期をどう迎えるか。重いテーマです。様々な意見や事情があると思います。私の場合、自分の最期の希望を明確にし、家族や医師などに事前に伝えておき



デザイン部・小林早希

考え、1か月前、「日本尊厳死協会」(本部・東京)の会員になりました。名刺サイズの会員証には「尊厳死の宣言書」(リビング・ウィル、終末期医療における意思表示書)として3項目が書かれています。

備えあれば

たい。それが自分にとっても、家族にとっても、よい方法なのではないかと。尊厳死とは、本人の意思で安らかな最期を迎えること。「自然死」「平穏死」とも言います。患者の希望で医師が積極的に死期を早める「安楽死」とは違います。

日本尊厳死協会の会員は全国に約11万人。会員が希望する最期を迎えられるよう、約1700人の協力医師が登録しています。年会費は1人2000円。いつでも、尊厳死の宣言を撤回し、退会することもできます。

①不治の病で死が迫っていると診断されたら、延命治療はしない②苦痛を和らげる医療は行ってほしい③回復不能な植物

会費1月、「もう少し具体的に」希望を示せるように」と、宣言書を補完する「私の希望表明書」を発行しました。最期を過ごしたい場所、自分で食べることがで

市販の「エンディングノート」にも、終末期の希望について書く欄を設けているものがあります。最期の迎え方を考えるきっかけになるかもおすすめです。(社会保障部 安田武晴)

「コラム」では、父親を見送った記者(48)が、最期に備えるための情報を伝えています。

川柳の投稿は、〒100-8055読売新聞京本社・社会保障部(ファクス03・3219957。Eメールnextlife@yomiuri.comへ。職業、氏名、年齢、住所、電話番号(携帯も)を明記。筆名も可。他のメディアに投稿した作品は受け付けません。「読売プレミアム」にも掲載します。

次回の「ミドルらい

よみうり 熟年川柳

片山一弘選

留守 脳下 熟年 あの一